

# 道元禅師頃の守持衣と掛絡

道元禅師は貞応二年(一二二二)、二十四歳の時、明全らとともに入宋した。四月の初め、慶元府(明州、寧波)の港に着き、天童山、阿育王山をはじめ杭州の径山の興聖万寿寺、台州の天台山の万年禅寺、台州の小翠岩、温州の雁山の能仁寺、さらに大梅山など各地の禅寺を遍歴し、嘉祿二年(一二二六)三月、天童山で如浄に参じて正伝の仏法を伝授された。入宋後五年を経た安貞元年(一二二七)秋、宋より帰国している。

禅師は慶元府の南方にある天台山を訪ねているが、天台山は智顛(五三八―五九七)が修禪の地として入り、堂塔を整備して国清寺を開いた地である。天台宗の根本道場で、我国の最澄、円珍、斎然、成尋、重源、俊苺、栄西ら多くの日本僧が天台山の地を踏んでいる。天台山巡礼のハイライトとされたのが石梁瀑布であった。ここは

五百羅漢と呼ばれる五百人の聖僧が示現する場所と信じられ、天然の石橋の下をほとばしる滝の景観で知られている。この石橋を無事に渡り、生身の羅漢にまみえて茶を供えることが天台山巡礼の最大の目的であった。

天台山の五百羅漢の姿を描いた図が、平成二十一年七月十六日より八月三十日まで奈良国立博物館で開かれた「聖地寧波」展で出品された。これは京都市の大徳寺に所蔵しており、一幅に五人の羅漢が描かれて百幅となっていた。しかし、江戸初期には六幅が亡失しており、アメリカのボストン美術館やフリーア美術館にも十二幅が所蔵されている。

銘文によれば十二世紀の後半、慶元府の東南にある東銭湖のほとりにあった惠安院の僧義紹が、淳熙五年(一二七八)から十年の歳月をかけて林庭珪と周季常という二

人の画人に描かせ、惠安院に奉納されたものであった。道元禅師が入宋する三十五―四十五年程前のことである。

この羅漢図の特色は、仏教史上のさまざまな出来事をあらわす事例や経典などに基づく仏教説話の事例、さらに当時の僧院における集団生活の様子を写した一連の内容がふんだんに描きこまれていることである。そのため当時の僧院生活を伝える視覚資料としても注目されるものであった。

その四十八幅に浴室を訪れる様子がある。よくみると、上方部に草履が整然と並べられている。太鼓が打ち鳴らされ、風呂の準備が整ったことを知らせているように、風呂敷包みを持った羅漢たちが次々と集まってきている。五人の羅漢はすべて掛絡を搭けている。(図一)

その掛絡は一長一短の五条衣で、

腰から下半身をおおう大きな掛絡である。竿は一本で、左胸あたりには円環がついており、一文字の鉤で袈裟を吊るしている。左側の竿が背中にあるところから、守持衣のように腹部より右側の下半身をおおう搭け方と思われる。そのため掛絡のような二本の竿で前から搭ける搭け方ではない。

この図から禅師の入宋以前中国での掛絡の様子を知ることができ、禅師も入宋中にこのような掛絡を搭けていたのであろうか。いろいろな想像が浮かんでくる。

『正法眼藏』袈裟功德には、入宋中の嘉定十七年(一二二四)十月に慶元府であった二人の高麗僧(智玄、景雲)のことが述べられている。彼らはしきりに仏教経典の意義を語り、文学にも心得のある人であった。しかし、袈裟も応量器もなく、俗人のようであったといわれる。このことから当時は、袈裟を搭け

ずに往来していた僧のいたことがわかる。

また、『正法眼藏』伝衣には、西天より伝来せる袈裟、ひさしく漢唐につたはれることをあらためて、小量にしたがふる、これ小見によりてしかあり。小見のはづべきなり。もしいまなんぢが小量の衣をもちいるがときは、仏威儀おほく虧闕することあらん」とっており、インドから伝来した袈裟が長い間中国に伝わり、五条衣を掛絡という小型のものに改めた見解に従っている。これは考え方が小さいためであり、自己の小見をはずかしく思うべきである。もし今、あなたが小量の袈裟を着用するよいうなことでは、仏の威儀が多く欠けることであろうということから、道元禅師の時代には小量の衣である掛絡はあったが、それは仏の威儀でないという。

さらに、『正法眼藏』袈裟功德には